

もうひとつの東大八チ公物語 犬の病気の变遷

東京大学大学院農学生命科学研究科 獣医病理学研究室

中山 裕之

忠犬八チ公は 1935 (昭和 10) 年 3 月 8 日早朝死亡した。満 11 歳であった。当時としては長寿であったと思われる。遺体は同日午後東京大学で解剖され、死因は犬糸状虫 (フィラリア) 症と診断された。昭和初期の犬の寿命は現在よりはるかに短かったと推定される。1 歳齢以下の犬の多くはジステンパーなどの感染症で死亡し、運良く 1 歳を超えるまで生きた犬もフィラリア症が原因で死亡していた。

私たちの研究室では 2011 年 3 月に、保存されていた八チ公の臓器を再検査し、肺と心臓のがんもその死因と考えられることを発表した。八チ公の死から 80 年近くたった現在、犬の死亡原因の多くはがんである。獣医療の進歩や動物衛生事情の進展により、犬の寿命は飛躍的に延長した。その結果、伴侶動物においてもがんを含む成人病が死因の多くを占めるようになった。

八チ公の死因の解明は、図らずも、昭和初期から現在に至る犬の病気の变遷を映し出すことになった。